

## 語末が「ズ」であるチーム名・グループ名のアクセント分析

著者	儀利古 幹雄, 大下 貴央, 窪菌 晴夫
雑誌名	国立国語研究所論集
号	2
ページ	1-18
発行年	2011-11
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000479">http://doi.org/10.15084/00000479</a>

## 語末が「ズ」であるチーム名・グループ名のアクセント分析

儀利古幹雄<sup>a</sup>      大下 貴央      窪菌 晴夫<sup>b</sup>

<sup>a</sup>国立国語研究所 理論・構造研究系 プロジェクト研究員

<sup>b</sup>国立国語研究所 理論・構造研究系

### 要旨

本研究は、語末が「ズ」であるチーム名およびグループ名（例：ライオンズ、ホエールズ）のアクセントの決定要因を明らかにし、「ズ」という形態素の音韻的本質を考察する。本研究で実施した発話調査の結果、チーム名・グループ名を形成する「ズ」は、語幹の音節構造におけるデフォルト型アクセントを生起させる性質を有することが明らかになった。この現象は、日本語における無標の表出 (the emergence of the unmarked) であり、平板型アクセントが有標であることを示唆している\*。

**キーワード**：ズ、デフォルト型アクセント、音節構造、平板型アクセント、無標の表出

### 1. はじめに

本研究は、語末が「ズ」であるチーム名およびグループ名のアクセントがどのようにして決まっているのかを分析し、日本語における「ズ」という形態素の本質を明らかにすることを目的とする。(1)に、語末が「ズ」であるチーム名やグループ名を例示する(以下,[<sup>ː</sup>]はアクセントを表す)。

- (1) a. キャ<sup>ː</sup>ンディーズ (音楽グループ)
- b. ラ<sup>ː</sup>イオンズ (野球チーム)
- c. ド<sup>ː</sup>ラゴンズ (野球チーム)
- d. マ<sup>ː</sup>リナーズ (野球チーム)
- e. ウ<sup>ː</sup>ルフルズ (音楽グループ)
- f. ピ<sup>ː</sup>ストルズ (音楽グループ)

(1)からわかるように、「ズ」が付加されるとアクセントは形態素境界から離れた位置に付与される。この現象は、局所性 (locality) という観点から見て非常に興味深い。多くの言語における接辞は、一般的に語幹 (root) の中で接辞に最も近い位置にアクセントを付与する傾向がある<sup>1</sup>。

\* 本稿は第46回 NINJAL サロン (2011年5月24日於国立国語研究所)、並びに International Symposium on Accent and Tone 2010 (2010年12月20日於国立国語研究所)における発表を基としている。なお本研究は、国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」(代表者：窪菌晴夫)の助成を受けて行われた。

<sup>1</sup> この点に関して、Revithiadou (2008: 150) は以下のように述べている。

[[an accent] never lands further than the immediately neighboring syllable [from its affix].]

また、Alderete (2001: 246-247) には以下の記述がある。

[...when an affix-triggerred alternation is local, it is bound to either a prosodic or a morphological category adjacent to the affix.]

たとえば、接頭辞であれば語幹の初頭位置にアクセントを付与し (root-initial-accenting)、接尾辞であれば語幹の末尾位置にアクセントを付与する傾向がある (root-final-accenting)。これがいわゆる局所的 (local) なアクセント付与 (local accentuation) である。この現象の例としては、(2) のようなギリシャ語の属格を表す [-u] や (3) のような英語のクラス I 接辞の [-ic] などが挙げられる。

- (2) ギリシャ語の属格 [-u]
- a. *ánthrop-os* 人間 (主格)
  - b. *anθróp-u* 人間 (属格)
- (3) 英語のクラス I 接辞 [-ic]
- a. *ecónomy*
  - b. *económ-ic*

日本語の接辞も (4) に示すように、基本的には局所的なアクセント付与を要求する (Poser 1984, Kurisu 2001) (以下, [°] は平板型アクセント, [+] は形態素境界を表す)。

- (4) a. さかさま<sup>°</sup> → まっ+さ<sup>°</sup>かさま (真逆様)  
 b. たなか<sup>°</sup> → たなか<sup>+</sup>け (田中家)

(4a) は「真/ma/」という接頭辞の例であるが、この場合には語幹の初頭音節にアクセントが付与される。その一方で、(4b) の「家/ke/」という接尾辞の場合には、語幹の最終音節にアクセントが付与される。換言すると、接辞が語幹の初頭に付加されようが語末に付加されようが、アクセントは常に形態素境界付近に置かれる。この点は日本語の複合名詞アクセントも同様であり、その意味において複合名詞でも基本的には局所的なアクセント付与が要求されると言える<sup>2</sup>。(5) に複合名詞アクセントの例を挙げる。

- (5) a. に<sup>°</sup>んぎょ+ひ<sup>°</sup>め → にんぎょ<sup>°</sup>+ひめ (人魚姫)  
 b. に<sup>°</sup>わか+あ<sup>°</sup>め → にわか+あ<sup>°</sup>め (にわか雨)

しかし、語末が「ズ」であるチーム名およびグループ名では、(1) に示したようにアクセントが形態素境界から離れた位置に置かれる例が散見される。即ち、語末に付加される「ズ」は、局所的なアクセント付与を要求しない (non-local accenting)。以上のような意味で、語末が「ズ」であるチーム名およびグループ名のアクセントは極めて興味深いと言える。

このアクセント現象を、実験を交えつつ Optimality Theory (OT; Prince and Smolensky 1993/2004) の枠組みで理論的に分析した研究が Kawahara and Wolf (2010) (以下, K & W (2010)) である。K & W (2010) は、チーム名およびグループ名のアクセントを分析し、(i) [ーズ] が

<sup>2</sup> この例外に当たるのが、後部要素が平板化形態素 (deaccenting morpheme; McCawkey 1968) である複合名詞のアクセントである。この場合、局所的なアクセント付与は要求されず、複合名詞全体が平板型アクセントで発音される (しんぞう+びょう<sup>°</sup> (心臓病), パーキンソン+びょう<sup>°</sup> (パーキンソン病))。

形態素を成していること（[ーズ]は、たとえばマリナーズにおける語末2モーラを意味する）、(ii) 語幹のアクセントが平板型か尾高型の場合、[ーズ]はアクセントを語幹の初頭音節に付与すること（root-initial-accenting）、以上の2点を主に主張した。このうち、[ーズ]が形態素を成しているというK&W(2010)の主張に対しては、大下(2010)が反論している。K&W(2010)は、「ギンタマーズ<ギンタマ（銀魂）」や「アワーズ<あわ（泡）」のような例を挙げ、「ズ」を付加してチーム名等を形成する際には語幹が長音化する傾向があることを指摘した。この観察に基づいてK&W(2010)は「ズ」ではなく長音を含んだ形の「ーズ」を形態素として分析した。他方、大下(2010)は、チーム名およびグループ名を形成する‘-s’の借用形には「ス」(カブス)と「ズ」(マリナーズ)の2通りがあることに着目し、どのような音韻的環境において‘-s’が「ス」あるいは「ズ」として実現されるかという問題を考察した。発話調査の結果、語幹の語末が長音である場合に‘-s’は「ズ」として実現されやすく、語末が短音である場合には逆に「ス」として実現される傾向が強いことを明らかにした。この語幹末母音の長短と‘-s’の実現形との関係は、語末の長音化が「ズ」の音韻的な要請によって生じていることを示唆している。このことから、「ズ」に先行する長音は形態素の一部ではなく、伝統的に言われてきたように「ズ」が形態素であると言える。以上のような理由により、K&W(2010)と異なり、本研究では「ズ」を形態素として認める。

また、K&W(2010)の「語幹が平板型か尾高型の場合、[ーズ]はアクセントを語幹の初頭音節に付与する」という分析にも問題がある。この一般化に従わない(6)のような例外が観察されるためである。

- (6) カナリアーズ<カナリア<sup>0</sup>  
 a. カナ<sup>1</sup>リアーズ  
 b. ?カナ<sup>1</sup>リアーズ

K&W(2010)に依拠すれば、語幹が平板型アクセントで発音される「カナリア」であるため、(6b)のアクセント型が予測される。しかし、後述するようにこのような発話が観察されることは非常に稀であり、実際の発話で観察されるのは(6a)のアクセント型である。このことは、K&W(2010)の分析では、語末が「ズ/ーズ」であるチーム名およびグループ名のアクセントを包括的に説明できないことを示唆している。

本研究では、K&W(2010)と異なり、チーム名およびグループ名を形成する形態素「ズ」は、語幹におけるデフォルト型アクセントを生起させるという分析を提示する。ここで言う「デフォルト型アクセント」とは、語幹の音節構造において最も生起頻度が高い有核のアクセント型を指す。たとえば、LLLLL構造（以下、Lは軽音節、Hは重音節を表す）の語において最も生起頻度が高いのは、語末から3番目のモーラを含む音節にアクセントが置かれる型である（McCawley 1968; LLL<sup>1</sup>LL）。(7)にLLLLL構造の語例を挙げる。

- (7) クリス<sup>1</sup>マス、ダマス<sup>1</sup>クス、プタペ<sup>1</sup>スト、イスラ<sup>1</sup>エル

LLLLL構造の語に「ズ」が付加された場合には、(7)のアクセント型が反映される。「ズ」

という形態素が語幹のデフォルト型アクセントを生起させる特性を有するためである。即ち、LLLLL 構造であり平板型アクセントで発音される「パタゴニア<sup>0</sup>」のような語幹に「ズ」を付加してチーム名を形成する場合には、本研究の分析に従うと「パタゴ<sup>0</sup>ニアズ」というアクセントが予測される。

また (6) で挙げた「カナリアーズ」の場合には、本研究では「ズ」を形態素として認め「カナリアー」が語幹であると考えられるため、(6a) の「カナ<sup>0</sup>リアーズ」というアクセント型を予測する。語幹である「カナリアー」は LLLH 構造であり、その構造における最も生起頻度が高い有核のアクセント型(デフォルト型アクセント)は語末から3つ目の音節にアクセントが置かれるパターン (LL<sup>0</sup>LH) であるためである。本研究では、実在語から成る新造語および無意味語を用いた発話調査を行い、上記の分析が正しいことを実証的に示す。

2 節では、K & W (2010) を概観する。続く 3 節では、実在語から成る新造語および無意味語を用いた発話調査の手法や結果について報告する。4 節では、調査結果に基づいて「ズ」の本質を分析し、それが含意するところを考察する。最後に第 5 節で本研究を総括し、今後の課題を述べる。

## 2. 先行研究

### 2.1 Kawahara and Wolf (2010)

K & W (2010) が挙げた語例を、語幹のアクセント別にまとめると (8) のようになる。

- (8) K & W (2010) の語例
- a. 語幹が頭高型の場合
    - i. マ<sup>0</sup>リナーズ < マ<sup>0</sup>リナー
    - ii. キャ<sup>0</sup>ンディーズ < キャ<sup>0</sup>ンディー
    - iii. ア<sup>0</sup>ントラーズ < ア<sup>0</sup>ントラー
  - b. 語幹が平板型の場合
    - i. ラ<sup>0</sup>イオンズ < ライオン<sup>0</sup>
    - ii. と<sup>0</sup>んねるず < トンネル<sup>0</sup>
  - c. 語幹が尾高型の場合
    - i. ア<sup>0</sup>ワーズ < あわ<sup>0</sup>(泡)
    - ii. ド<sup>0</sup>ロンズ < ドロ<sup>0</sup>ン

ここで K & W (2010) が注目したのは (8b) と (8c) の例である。(8b) では、語幹が平板型であるのに、「ズ」が付加された語形では頭高型アクセントが生起している。(8c) では、語幹の辞書的なアクセントが尾高型であるのに、「ズ」が付加されるとやはり頭高型アクセントが生起している。つまり、語幹のアクセントはチーム名・グループ名においてそのまま保持されず、全体として頭高型アクセントが生起している。K & W (2010) は、上記のような傾向が新造語においても観察されるかを確認するため発話実験を行った。その結果、(i) 語幹が平板型アクセント

トである場合は「ーズ」を付加すると頭高型アクセントが生起すること（アンテナーズ < アンテナ<sup>0</sup>）、(ii) 語幹が尾高型アクセントである場合も「ーズ」を付加すると頭高型アクセントが生起すること（ゴ<sup>0</sup>ミーズ < ゴミ<sup>0</sup>）、(iii) 語幹が中高型アクセントである場合は「ーズ」を付加しても語幹のアクセントがそのまま保持されること（アザ<sup>0</sup>ラシーズ < アザ<sup>0</sup>ラシ）、以上の3点を明らかにした<sup>3</sup>。

## 2.2 問題点

前節で述べたように、K & W (2010) は基本的に、「ーズ」が語幹の初頭音節にアクセントを付与する性質を有していると分析している。しかし、この分析には大きな問題点が残されている。それは、1節でも述べたように、この分析がチーム名およびグループ名のアクセントを包括的に説明できないことである。つまり、彼らの分析では(6)に挙げたような例が説明できない。また、「パタゴニアーズ」という新造語が頭高型アクセントを取るとも直感的に考えづらい。このことも K & W (2010) の分析の不備を示唆している。

以上のような問題を解決するために、本研究では K & W (2010) に代わる新たな分析を提示する。具体的には、チーム名およびグループ名を形成する形態素「ズ」は、語幹におけるデフォルト型アクセントを生起させる性質を有することを主張する。この分析の妥当性を立証するために実在語から成る新造語や無意味語を用いた発話調査を行った。

## 3. 調査

### 3.1 方法

調査に用いた語は2つに大別できる。一つ目は K & W (2010) の実験で用いられた語（第 I 群）であり、もう一つは本研究で新たに加えた語（第 II 群）である。

表 1 に示すように、第 I 群の語幹は 2～5 モーラである。これらは平板型・中高型・尾高型の 3 種類のアクセント型に大別できる。

表 1 第 I 群の語幹

	2 モーラ	3 モーラ	4 モーラ	5 モーラ
平板型	—	ウサギ クルマ	アンテナ サクラギ	—
中高型	—	ノミヤ	マッタリ アザラシ	ハリケーン マシンガン
尾高型	ゴミ ダメ	—	センセー タノシー	—

<sup>3</sup> Kawahara and Wolf (2010) は、語幹の語彙的なアクセントが中高型である場合には、「ーズ」が有する語幹の初頭音節にアクセントを付与しようとする力が働かないことを認めているが、この理由として MAX (root accent) (Protects root accents from deletion; 語幹のアクセントを保持せよ) という制約の存在を挙げている。しかし、この制約は他の制約と比較して下位に順位付けられている。この OT の枠組みに即した理論的分析からも、Kawahara and Wolf (2010) が「ーズ」は語幹の初頭音節にアクセントを付与する性質を原則的に有すると分析していることが窺える。

第II群の語幹は3～5モーラである(表2)。これらのうち7語は無意味語でありアクセント型を統一することはできなかったが、実在語の語幹のアクセント型はすべて平板型に統一した。無意味語は実在語の子音を変化させて作成した。また、実在語において第一母音と第二母音の聞こえ度が大きく異なる場合には、無意味語を作成する際にその差が小さくなるように(または差がなくなるように)母音を変化させた(ピアノ /piano/ → パラモ /paramo/)。

表2 第II群の語幹

	実在語	無意味語
3モーラ	ピアノ	パラモ
4モーラ	マカロニ, カナリア	マラコニ, サナミア
5モーラ	パタゴニア, セロトニン	パラザミア, ソロコニン

それぞれの語群はさらに、語幹のみの系列(語幹系列)、語幹に「ズ」を付加した系列(「ズ」系列)、語幹の語末を長音化した系列(「ー」系列)、語幹の語末を長音化した上で「ズ」を付加した系列(「ーズ」系列)、以上4つの系列に分類される。(9)に調査語の系列と語数をまとめ、語例を示す(括弧内の数字は語数を表す)。

(9) 調査語の系列と語数および語例

- a. 第I群 (85)
  - i. 語幹系列 (31): ゴミ
  - ii. 「ズ」系列 (8): ゴミズ
  - iii. 「ー」系列 (23): ゴミー
  - iv. 「ーズ」系列 (23): ゴミーズ
- b. 第II群 (68)
  - i. 語幹系列 (20): ピアノ
  - ii. 「ズ」系列 (20): ピアノズ
  - iii. 「ー」系列 (14): ピアノー
  - iv. 「ーズ」系列 (14): ピアノーズ

本調査に参加した被験者は合計24名である。その内12名が関西方言話者であり、残りの12名が東京方言話者である。いずれの方言においても8名が若年層(18歳～34歳)であり、4名が中年層(44歳～57歳)である。

調査はすべて一対一の対面方式で行った。具体的な調査の手順は以下の通りである。まず、すべての調査語を無作為に並べ替え、「ーズ」系列と「ズ」系列が列挙された表、「ー」系列のみが列挙された表、語幹系列のみが列挙された表、以上の3パターンの調査語表を作成した。次に、被験者にまず「ーズ」系列と「ズ」系列が列挙された表を提示し、各語2回ずつ発音してもらった。そして「ー」系列のみが列挙された表を提示し、同様に各語2回ずつ発音してもらった。最後に、語幹系列のみが列挙された表を提示し、これについても各語2回ずつ発音してもらった。

どの調査語表を提示する際にも、被験者には調査語表に書かれている語がすべてグループ名であることを伝えた。なお、調査語はすべてカタカナで表記した。

### 3.2 デフォルト型アクセント

ここで、本研究の分析において最も重要な概念となるデフォルト型アクセントについて詳細に説明しておきたい。伝統的に日本語の外来語アクセントは、語末から3番目のモーラを含む音節に付与されると分析されてきた (McCawley 1968)。(10) にいくつか語例を挙げる。

- (10) a. ク<sup>ˈ</sup>ラス, スト<sup>ˈ</sup>レス, クリス<sup>ˈ</sup>マス  
b. コ<sup>ˈ</sup>ンパス, コ<sup>ˈ</sup>ーパス, スウェ<sup>ˈ</sup>ーデン, マシ<sup>ˈ</sup>ンガン

(10a) は、語末から3番目の音節とモーラが一致している例である。(10b) は、語末から3つ目のモーラが特殊拍 (長音、撥音、促音、二重母音の第二要素) であるために、アクセントが先行するモーラに移っている例である。いずれにしても、(10) に挙げた例はすべて、語末から3番目のモーラを含む音節にアクセントが付与されている。これが日本語外来語における伝統的なデフォルト型アクセントである。

McCawley (1968) の提唱したこの伝統的なアクセント規則は、日本語音韻論の諸領域において長い間支持されてきた。しかし近年の外来語アクセント研究によって、この規則では説明できないアクセントが多数指摘され、デフォルト型アクセントは語の音節構造によって異なると主張されるようになった。(たとえば, Katayama 1998; Kubozono 1996, 2006, 2008; Shinohara 2000; Shiozaki 2007)。(11) に近年の研究でデフォルト型とされるアクセントを、音節構造別にまとめる (# は語境界を表す)。

- (11) デフォルト型アクセント
- a. ...L<sup>ˈ</sup>LL#: ク<sup>ˈ</sup>ラス, スト<sup>ˈ</sup>レス, クリス<sup>ˈ</sup>マス  
b. ...L<sup>ˈ</sup>LH#: カ<sup>ˈ</sup>ロリー, エ<sup>ˈ</sup>ナジー, グレ<sup>ˈ</sup>ムリン  
c. ...LH<sup>ˈ</sup>L#: パレ<sup>ˈ</sup>ード, スポ<sup>ˈ</sup>ーツ, トラ<sup>ˈ</sup>ンプ  
d. ...H<sup>ˈ</sup>LL#: コ<sup>ˈ</sup>ンパス, コ<sup>ˈ</sup>ーパス, ボ<sup>ˈ</sup>ーナス  
e. ...LH<sup>ˈ</sup>H#: ピエ<sup>ˈ</sup>ンチャン, ノモ<sup>ˈ</sup>ンハン, コーディネ<sup>ˈ</sup>ーター  
f. ...H<sup>ˈ</sup>LH#: ア<sup>ˈ</sup>ーチェリー, ア<sup>ˈ</sup>イボリー, モ<sup>ˈ</sup>ンブラン  
g. ...HH<sup>ˈ</sup>L#: ア<sup>ˈ</sup>ーケ<sup>ˈ</sup>ード, アンティ<sup>ˈ</sup>ーク, ヨーロ<sup>ˈ</sup>ッパ  
h. ...HH<sup>ˈ</sup>H#: アンツ<sup>ˈ</sup>ーカー, ケンタ<sup>ˈ</sup>ッキー

(11b, f) 以外の語はすべて、語末から3番目のモーラを含む音節にアクセントが付与されているため、McCawley (1968) のアクセント規則でも説明できる。しかし (11b, f) は、語末から3番目のモーラを含む音節より前の音節にアクセントが付与されているため、伝統的なアクセント規則で説明できない。この2つに共通しているのは、語末の音節構造が LH であるという点である。つまり、語末の音節構造が LH である場合においてのみ、McCawley (1968) の伝統的な規



則が予測するアクセントと近年の研究でデフォルト型とされるアクセントが食い違う。

本研究で「デフォルト型アクセント」と呼称するのは、McCawley (1968) の規則が予測するアクセントではなく、(11) に挙げた音節構造別のアクセントである。特に次節以降で問題となるのが、語幹が LH で終わる場合のチーム名・グループ名のアクセントである。

### 3.3 予測

K & W (2010) は、「ーズ」が形態素を成しており、「ーズ」は原則的にアクセントを語幹の初頭音節に付与すると分析した。ただし、語幹が中高型アクセントの場合には、「ズ」が付加された語形でも語幹のアクセントが保持されるとも述べている（注2を参照）。一方、本研究では「ズ」が形態素であり、「ズ」は語幹の音節構造におけるデフォルト型アクセントを生起させると分析する。

両者の分析は多くの場合において同じ出力を予測する。たとえば「ウサギーズ」という語を例にとると、K & W (2010) の分析は語幹の初頭音節にアクセントが付与された [ウ<sup>0</sup>サギ][ーズ] というアクセント型を予測する。また、本研究は「ウサギーズ」の語幹を「ウサギー」と考えるため、[ウ<sup>0</sup>サギー][ズ] というアクセントを予測する。これは、語幹の音節構造 (LLH 構造) におけるデフォルト型アクセントが (11) に示したように頭高型 (L<sup>0</sup>LH) であるためである (Katayama 1998, Kubozono 1996, 他)。このように両者の予測は多くの場合において一致する。つまり、チーム名・グループ名の初頭音節が「ズ」に先行する部分のデフォルトアクセント位置である場合、両者は同様のアクセント型を予測する。

「ーズ」に先行する部分 (K & W (2010) が語幹とする部分) のアクセントが中高型である場合も両者の予測は一致する。「ムラサキーズ」を例にとると、K & W (2010) に従えば、[ムラ<sup>0</sup>サキ][ーズ] というアクセントを予測する。これは、語幹が中高型アクセントである場合、語幹のアクセントは保持されるという K & W (2010) の一般化から導かれる。本研究も同じ出力を予測する。ただし本研究では、「ムラサキー」という語幹のデフォルト型アクセントが表出した結果、[ムラ<sup>0</sup>サキー][ズ] が出力されると考える ((11b) 参照)。

さらに、K & W (2010) は「ーズ」を形態素として分析しているため、「ズ」系列のアクセントを予測できない。従って、両者の予測の相違点が見られるのは、「ーズ」系列に限られる。以上のことをまとめると、表3に示すように、K & W (2010) の予測と本研究の予測の相違点は、「ズ」に先行する部分——本研究が語幹とみなす部分——の音節構造が LLLH, LLLLH であり、かつ「ーズ」に先行する部分——K & W (2010) が語幹とみなす部分——が平板型アクセントである「ーズ」系列の調査語においてのみ観察されるということになる (カナリアーズ < カナリアー < カナリア, パタゴニアーズ < パタゴニアー < パタゴニア)。

表3 予測

	K & W (2010)	本研究
LHズ	a. [ゴ <sup>1</sup> ミ][ーズ]	g. [ゴ <sup>1</sup> ミー][ズ]
LLHズ	b. [ウ <sup>1</sup> サギ][ーズ]	h. [ウ <sup>1</sup> サギー][ズ]
LLLHズ	c. [カ <sup>1</sup> ナリア][ーズ]	i. [カナ <sup>1</sup> リアー][ズ]
HLHズ	d. [ガ <sup>1</sup> ンバリ][ーズ]	j. [ガ <sup>1</sup> ンバリー][ズ]
LLLLHズ	e. [パ <sup>1</sup> タゴニア][ーズ]	k. [パタゴ <sup>1</sup> ニアー][ズ]
HHHズ	f. [ノーテ <sup>1</sup> ンキ][ーズ]	l. [ノーテ <sup>1</sup> ンキー][ズ]

たとえば、「ズ」に先行する部分が「カナリアー」である場合、K & W (2010) は平板型アクセントで発音される「カナリア」を語幹として分析するため、[カ<sup>1</sup>ナリア][ーズ]という出力を予測する。一方、本研究の分析は、[カナ<sup>1</sup>リアー][ズ]という語頭から2音節目にアクセントが付与されるパターンを予測する。これは、「カナリアーズ」の語幹の音節構造（LLLH構造）におけるデフォルト型アクセントが、語頭から2音節目にアクセントを付与するパターンであるためである。

「ズ」に先行する部分が「パタゴニアー」である場合でも、K & W (2010) は平板型アクセントで発音される「パタゴニア」を語幹として分析するため、[パ<sup>1</sup>タゴニア][ーズ]という初頭音節にアクセントが付与されるパターンを予測する。一方、本研究の分析は、[パタゴ<sup>1</sup>ニアー][ズ]という語頭から3音節目にアクセントが付与されるパターンを予測する。これも「パタゴニアーズ」の語幹の音節構造（LLLLH構造）におけるデフォルト型アクセントが語頭から3音節目にアクセントが付与されるパターンであるためである。

### 3.4 結果

K & W (2010) と本研究の説明力を比較するためには、「ズ」に先行する部分の音節構造がLLLH, LLLLHであり、かつ「ーズ」に先行する部分が平板型アクセントである「ーズ」系列の調査語の結果を観察すればよい。それらの世代別の結果を以下に提示する（以下、「初頭音節」は語幹の初頭音節にアクセントが付与された例、「第二音節」は語頭から2音節目にアクセントが付与された例、「その他」はそれ以外のアクセント型で発音された例を表す）。ちなみに両者の予測が一致する場合の調査結果は付録にまとめるが、すべて両者の予測通りの結果が得られている。

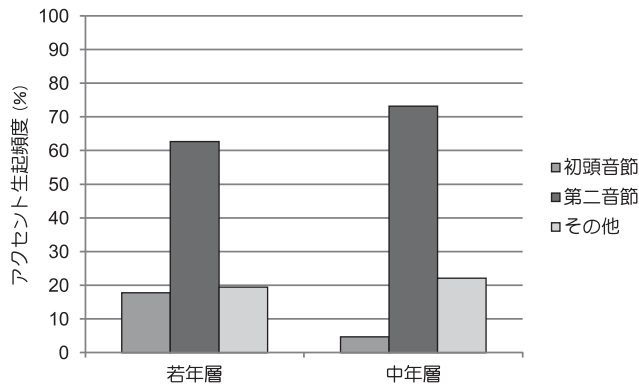


図1 第I群における「LLLHズ」のアクセント

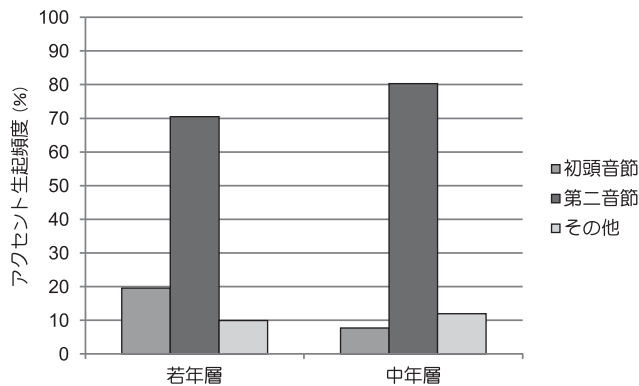


図2 第II群における「LLLHズ」のアクセント

図1は、「ズ」に先行する部分の音節構造がLLLHであり、かつ「ーズ」に先行する部分が平板型アクセントである第I群の調査語を用いた場合の結果である。この図からまず、語幹の初頭音節にアクセントが付与されるパターンは、若年層で20%弱、中年層で5%弱しか生起しないことが見て取れる。一方で、語頭から2音節目にアクセントが付与されるパターンの生起頻度が、若年層で約60%、中年層で約70%と圧倒的に高いことも窺える。図2も同様である。図2は「ズ」に先行する部分の音節構造がLLLHであり、かつ「ーズ」に先行する部分が平板型アクセントである第II群の調査語を用いた場合の結果を示しているが、ここでもK & W (2010)の予測する結果は得られず(表3cを参照)、語頭から2音節目にアクセントが付与されるパターン(表3iを参照)の生起頻度が高くなっている(若年層:約70%、中年層:約80%)。

即ち、K & W (2010)の予測は彼ら自身の調査語を用いても、本研究独自の調査語を用いても支持されない。逆に図1と図2は、本研究の予測が正しいことを明示している。つまり図1と図2に示した結果は、「ーズ」は語幹の初頭音節にアクセントを付与するというK & W (2010)の分析を否定し、その一方で「ズ」は語幹の構造におけるデフォルト型アクセントを生起させるという本研究の分析を支持するのである。

次に、「ズ」に先行する部分の音節構造が LLLLH であり、かつ「ーズ」に先行する部分が平板型アクセントである調査語を用いた場合の結果を図 3 に示す（「第三音節」は語頭から 3 音節目にアクセントが付与された例を表す）。なお、このタイプの調査語は第 II 群にしか含まれないため、第 II 群の結果のみを提示する。

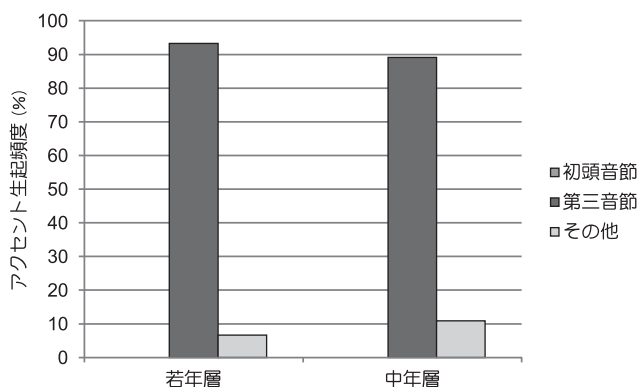


図 3 第 II 群における「LLLLH ズ」のアクセント

図 3 からまず、語幹の初頭音節にアクセントが付与されるパターン（表 3e を参照）はまったく生起しないことが見て取れる。その一方で、語頭から 3 つ目の音節にアクセントが付与されるパターン（表 3k を参照）の生起頻度が、若年層、中年層とも約 90% と圧倒的に高いことも窺える<sup>4</sup>。

以上、K & W (2010) の分析と本研究の分析の説明力を比較するため、「ズ」に先行する部分の音韻構造が LLLH, LLLLH であり、かつ「ーズ」に先行する部分が平板型アクセントである「ーズ」系列の調査語を用いた場合の結果を観察した。得られた結果はすべて、K & W (2010) の分析に基づく予想とは異なり、本研究の分析を支持するものであった。従って、K & W (2010) の提示した分析より、本研究の方が妥当な分析であると言えることができる。チーム名およびグループ名を形成する「ズ」は語幹の構造におけるデフォルト型アクセントを生起させ、それが語全体のアクセントとなるのである<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> 以上の結果には、無意味語の発音も含まれている。無意味語におけるアクセント分布と実在語におけるアクセント分布のクロス表を作成し、カイ二乗検定をかけたところ、統計的に有意な差は観察されなかった ( $\chi^2(2) = 3.778, p = .151 (n.s.)$ )。このことから、調査語の種類にかかわらず、「ズ」は一貫して語幹の構造におけるデフォルト型アクセントを生起させると言うことができる。

<sup>5</sup> 第 46 回 NINJAL サロン (2011 年 5 月 24 日於国立国語研究所) で発表した際に、語末が「ズ」であるチーム名およびグループ名のアクセントは、語幹のデフォルト型アクセントを反映しているのではなく、歴史的に古いアクセントをそのまま継承しているだけではないかという指摘を受けた。つまり、「ライオンズ」が頭高型で発音されるのは「ライオン」という語がもともと「ライオン」と頭高型で発音されており、それに「ズ」が付加されただけの形が現在でも残っているためであるという指摘である。この分析に従えば、「ズ」は語幹のアクセントに何の影響も及ぼさない韻律外的 (extrametrical; Hayes 1995) な要素ということになる。しかし、本研究では語幹が無意味語である調査語を用いた調査も行っており、その際にも語幹の構造におけるデフォルト型アクセントが生起することが確認されている。語幹が無意味語である以上、それは歴史的に

#### 4. 考察

前節の調査結果はいずれも、チーム名およびグループ名を形成する「ズ」は語幹のデフォルト型アクセントを生起させるという本研究の分析を支持するものであった。また付録に付した表から、この分析が3節で提示した調査語のアクセント以外をもすべて説明することがわかる。ここで、(1)に示した例に本研究の分析を当てはめてみたい。(1)の語例を再び(12)に挙げる。

- (12) a. キャ<sup>ン</sup>ディーズ (音楽グループ)  
 b. ラ<sup>イ</sup>オンズ (野球チーム)  
 c. ド<sup>ラ</sup>ゴンズ (野球チーム)  
 d. マ<sup>リ</sup>ナーズ (野球チーム)  
 e. ウ<sup>ル</sup>フルズ (音楽グループ)  
 f. ピ<sup>ス</sup>トルズ (音楽グループ)

(12a, b)の語における語幹の音節構造はHHである。HH構造におけるデフォルト型アクセントは頭高型(H<sup>^</sup>H)であるため、「キャ<sup>ン</sup>ディーズ」「ラ<sup>イ</sup>オンズ」というアクセント型が表出する。次に、(12c, d)であるが、これらの語幹の音節構造はLLHである。この音節構造におけるデフォルト型アクセントは頭高型であるため、「ド<sup>ラ</sup>ゴンズ」「マ<sup>リ</sup>ナーズ」というアクセント型が生起する。

(12e, f)の語のアクセントを説明するには、本研究の分析以外に少し補足が必要である。一見、(12e, f)の語幹の音節構造はLLLLであるように見える。LLLL構造の語には、デフォルトとして語末から3番目のモーラを含む音節にアクセントが置かれるため、「ウル<sup>ル</sup>フルズ」「ピス<sup>ト</sup>トルズ」というアクセントが予測される。しかしこのパターンは、本研究の分析が予測するところと整合しない。

ここで注目したいのは、これらの語幹の最終音節が/ru/であるということである。(13)に示すように、語末が/ru/, /su/, /hu/であるLLLL構造の語は頭高型アクセントを取ることが知られている。

- (13) ア<sup>ク</sup>セス, ア<sup>ク</sup>セル, カ<sup>ク</sup>テル, モ<sup>ロ</sup>ゾフ, サ<sup>ク</sup>セス

これは、語末の/ru/, /su/, /hu/が音節性(syllabicity)を喪失しており、特殊拍のように振る舞っているためである(Kubozono 1996, Labrune 2002, 他)。(14)にLLH構造の語のアクセントを示すが、(13)と同様すべて頭高型である。つまり、(13)と(14)の語のアクセントが同様であることから、語末の/ru/, /su/, /hu/が特殊拍と同様の働きをしていると分析できる。

- (14) エ<sup>ナ</sup>ジー, ト<sup>ロ</sup>フィー, パ<sup>ク</sup>チー, ド<sup>ラ</sup>ゴン, キャ<sup>プ</sup>テン

---

古いアクセント型を持ちえない。つまり、「ズ」はアクセントの決定に対して影響を及ぼすのである。従って、本研究の分析の通り、語末が「ズ」であるチーム名のアクセントは、語幹のデフォルト型アクセントによって決定されていると分析する方が妥当である。

このことから、語末が /ru/, /su/, /hu/ である LLLL 構造の語は基底では LLH 構造として振る舞っていると考えることができる。LLH 構造のデフォルト型アクセントは頭高型であるため、(12e, f) も本研究の分析によって説明可能である。

本分析の利点は、「ズ」系列のアクセントも、「ヅ」系列のアクセントも、同一の原理で説明できる点である。K & W (2010) の分析では、「ズ」を形態素として捉えているため、語末に「ヅ」のみが付加された語形のアクセントは何も説明しない。一方、本研究は、語幹末が長音である場合もそうでない場合も「「ヅ」は語幹の構造のデフォルト型アクセントを生起させ、それが語全体のアクセント型となる」という単一の原理ですべてを説明することができる。また、K & W (2010) は、語末が「ズ」であるチーム名およびグループ名のアクセントを記述するために、語幹のアクセントを考慮した3つの一般化を挙げているが(2.1節を参照)、本研究の分析ではそのようなことを考慮する必要がない。本研究の分析に従えば、語幹のアクセントがいかなるものであろうと、生起するアクセント型は「語幹の音節構造におけるデフォルト型アクセント」である。このように、本研究の分析は K & W (2010) の記述的一般化より単純である。この点においても、本研究の分析は K & W (2010) より優れている。

ここで注意しておきたいのが、「ヅ」はあくまで語幹のデフォルト型アクセントを生起させるのであって、語幹の辞書的なアクセントを変化させないわけではないという点である。語幹のアクセント位置を変化させないということは、「ヅ」が常にアクセント計算に際して不可視であることを意味するが、実際にはそうではない。このことは、語幹の辞書的なアクセントが尾高型である「ゴミズ」や「センサーズ」のような語から理解できる。もし仮に「ヅ」が語幹の辞書的なアクセントを変化させないのであれば、語幹である「ゴミ」「センサー(先生)」の辞書的なアクセントは尾高型であるため、これらの語のアクセントは「ゴミ<sup>´</sup>ズ」「センセ<sup>´</sup>ーズ」となるはずである。しかし実際はそうはならず、(15)に示すように、語幹が「ゴミ」である場合には LL 構造のデフォルト型である頭高型アクセントが表出し、語幹が「センサー(先生)」である場合にも同様に、HH 構造のデフォルト型である頭高型アクセントが表出する。即ち、「ヅ」は語幹の辞書的なアクセントを変化させないのではなく、語幹に働きかけそのデフォルト型アクセントを引き起こすという機能を担っていると言える。

- (15) a. ゴミ → ゴ<sup>´</sup>ミズ / \* ゴミ<sup>´</sup>ズ  
 b. センサー → セ<sup>´</sup>ンセーズ / \* センセ<sup>´</sup>ーズ

また、語幹の辞書的なアクセントが平板型であっても、「ヅ」を付加すると語幹の構造におけるデフォルト型アクセントが生起するという事実は、日本語における平板型アクセントが有標なアクセント型であることを含意する。(16)に、平板型アクセントの語幹に「ヅ」が付加されたチーム名およびグループ名をいくつか挙げる。

## (16) 平板型アクセント語幹 + 「ズ」

- a. ライオン<sup>0</sup> → ラ<sup>1</sup>イオン + ズ
- b. トンネル<sup>0</sup> → ト<sup>1</sup>ンネル + ズ
- c. パタゴニア<sup>0</sup> → パタゴ<sup>1</sup>ニア + ズ

非派生形と派生形という観点から考察すると、(16)に挙げた例はすべて、非派生形において平板型アクセントであったものが派生形では起伏型アクセントで発音されるようになっている。McCarthy and Prince (1994) は OT の枠組みに基づいて非派生形と派生形の関係を考察し「無標の表出 (The emergence of the unmarked, TETU)」(McCarthy and Prince 1994) という理論的概念を提案した。これは、有標な構造が基本的に許容されるような文法であっても、ある特定の領域においてはその有標な構造が出現することは避けられ、結果としてその領域では無標な構造しか出現しないという概念である。TETU はたとえば、オノマトペの語幹の有声化現象において観察される (那須 1999)。基本的にオノマトペにおいて有声音は語幹の左端に限り生じる (ざくざく / \*ざぐざぐ, \*さぐさぐ < さくさく; どくどく / \*どぐどぐ, \*とぐとぐ < とくとく)。しかし、語幹の第二子音が /p/ である場合はそれも有声化を起こす (だぶだぶ < たぶたぶ; ずばずば < すばすば)。この現象は、単独の /p/ は非派生形においては問題なく許容されるが、有声化という派生環境においては出現することが忌避されるという意味で TETU の例である。

本研究で扱った現象もこれと同様に捉えることができる。(16) で見たように、一般的に日本語において平板型アクセントは許容されるが、「ズ」が付加された派生形では平板型アクセントの生起が忌避され、語幹の構造において最も生起頻度の高い有核のアクセント型が生起する。これはまさに、日本語における TETU の一例である。ここから言えることは、日本語における平板型アクセントは有標なアクセント型であり、特定の環境でしか生起しないものであるということである。たとえば「カナリアズ」の非派生型である「カナリア」は平板型アクセントで発音されるが、これは「カナリア」という語が「4 モーラの長さを有し、かつ語末の音節構造が軽音節の連続 (LL) である」という音韻的要因を満たしているためである (詳しくは Kubozono 1996 を参照)。派生型では [カナ<sup>1</sup>リア][ズ] のように、語幹の構造におけるデフォルト型アクセントが生起する。つまり、平板型アクセントは音韻的要因、韻律的要因、形態的要因、意味的／語用論的要因など何らかの要因が作用してはじめて生起するアクセント型であり、すべての語は潜在的にアクセント核を有している。非派生形と派生形の対立と有標性の関係を表 4 にまとめる。

表 4 無標の表出

非派生形		派生形
ライオン <sup>0</sup>	→	ラ <sup>1</sup> イオン + ズ
有標		無標

## 5. 結論

本研究では、語末が「ズ」であるチーム名およびグループ名のアクセントがどのように決定さ

れているかを明らかにし、「ズ」の本質を分析することを目的として、実在語から成る新造語および無意味語を調査語として用いた発話調査を実施した。発話調査からは、K & W (2010) の分析と一致しない結果が得られた。このことは K & W (2010) の分析の誤りを指摘するものであると同時に、「ズ」は語幹の構造におけるデフォルト型アクセントを生起させるという本研究の分析を支持するものである。また、本研究で得られた調査結果および分析は、日本語における平板型アクセントが有標なアクセント型であることを含意する。つまり、平板型アクセントは何らかの要因によって生起するアクセント型であり、すべての語は潜在的にアクセント核を有している。

本研究の今後の課題としては、「語幹の音節構造におけるデフォルト型アクセントを生起させる」という「ズ」の特質の一般性に関する問題が挙げられる。これに似た性質を有する形態素は日本語にいくつか存在するが、いずれも「ズ」と完全に同じ性質を有しない。たとえば、「～さん」という形態素は、語幹の辞書的なアクセントを変化させず（秋永 1985）、たとえ語幹のアクセントが平板型であっても、そこに新しいアクセント核を付与することはない。

#### (17) 「～さん」のアクセント

- a. 語幹が起伏型の場合：か<sup>1</sup>とうさん（加藤さん）、なが<sup>1</sup>さきさん（長崎さん）
- b. 語幹が平板型の場合：いとうさん<sup>0</sup>（伊藤さん）、ひろしまさん<sup>0</sup>（広島さん）

また、「～氏」という形態素は、基本的に語幹の辞書的なアクセントを変化させないが、語幹が平板型アクセントであるときに限って語幹の最終モーラにアクセントを付与する（秋永 1985、佐藤 1989）。

#### (18) 「～氏」のアクセント

- a. 語幹が起伏型の場合：か<sup>1</sup>とうし（加藤氏）、なが<sup>1</sup>さきし（長崎氏）
- b. 語幹が平板型の場合：いとう<sup>1</sup>し（伊藤氏）、ひろしま<sup>1</sup>し（広島氏）

このように、「ズ」と完全に同様の性質を有する形態素は日本語に見当たらない。従って、本研究の分析がどの程度の一般性を持つのかという疑問が生じる。また、日本語以外の言語で「ズ」のような性質を有する形態素が存在するかどうかを確認することも必要である。これらの問題は今後の研究課題としたい。

### 参 照 文 献

- 秋永一枝 (1985) 「共通語のアクセント」『NHK 編 日本語発音アクセント辞典』巻末付録. 東京：日本放送協会出版.
- Alderete, John (2001) Dominance effects as transderivational anti-faithfulness. *Phonology* 18: 201-253.
- Hayes, Bruce (1995) *Metrical stress theory: Principles and case studies*. Chicago: University of Chicago Press.
- Katayama, Motoko (1998) *Optimality Theory and Japanese loanword phonology*. Doctoral dissertation, University of California, Santa Cruz.
- Kawahara, Shigeto and Matthew Wolf (2010) On the existence of root-initial-accenting suffixes: An elicitation study of Japanese [-zu]. *Linguistics* 48: 837-864.
- Kubozono, Haruo (1996) Syllable and accent in Japanese: Evidence from loanword accentuation. *The Bulletin* (Phonetic Society of Japan) 211: 71-82.



- Kubozono, Haruo (2006) Where does loanword prosody come from?: A case study of Japanese loanword accent. *Lingua* 116: 1140–1170.
- Kubozono, Haruo (2008) Japanese accent. In: Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford handbook of Japanese linguistics*, 165–191. Oxford: Oxford University Press.
- Kurusu, Kazutaka (2001) The phonology of morpheme realization. Doctoral dissertation, University of California, Santa Cruz.
- Labrone, Laurence (2002) The prosodic structure of simple abbreviated loanwords in Japanese: A constraint-based account. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 6(1): 98–120.
- McCarthy, John and Alan Prince (1994) The emergence of the unmarked: Optimality in prosodic morphology. *NELS* 24: 333–379.
- McCawley, James D. (1968) *The phonological component of a grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- 那須昭夫 (1999) 「オノマトベにおける有声化と [p] の有標性」『音声研究』3(3): 52–66.
- 大下貴央 (2010) 「外来語の連濁とライマンの法則—英語屈折接辞 's' の清濁について」修士論文. 神戸大学.
- Poser, William (1984) The phonetics and phonology of tone and intonation in Japanese. Doctoral dissertation, MIT.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (1993/2004) *Optimality Theory: Constraint interaction in generative grammar*. Oxford: Blackwell.
- Revithiadou, Anthi (2008) Colored turbid accents and containment: A case study from lexical stress. In: Sylva Blaho, Patrik Bye and Martin Kraemer (eds.) *Freedom of analysis?*, 149–174. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 佐藤大和 (1989) 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」杉藤美代子 (編) 『日本語の音声音韻』233–265. 東京: 明治書院.
- Shinohara, Shigeko (2000) Default accentuation and foot structure in Japanese: Evidence from Japanese adaptations of French words. *Journal of East Asian Linguistics* 9: 55–96.
- Shiozaki, Lisa (2007) What is the default accent in Japanese? *Proceedings of Formal Approaches to Japanese Linguistics* 4: 205–216.

## 付 録

- A. 第 I 群の調査語のアクセント（下表の「LLLH ズ」の欄の数値は、「ーズ」に先行する部分が平板型で発音されるもの（サクラギーズ < サクラギ, ヤナギバーズ < ヤナギバ）の発音を除外した数値である。以下、「初頭音節」は語幹の初頭音節にアクセントが付与された例, 「語幹-3」は「ズノーズ」に先行する部分の語末から 3 番目のモーラを含む音節にアクセントが付与された例, 「その他」はそれ以外の位置にアクセントが付与された例, [✓] はその予測が支持されること, [–] はその調査語のアクセントを何も予測しないことを表す)

表 5 「ーズ」系列のアクセント

	初頭音節	語幹-3	その他	K & W	本研究
LLH ズ (クルマーズ)		93.3 (ク <sup>ル</sup> マーズ)	6.7	✓	✓
LLLH ズ (ムラサキーズ)	18.4 (ム <sup>ラ</sup> サキーズ)	76.8 (ム <sup>ラ</sup> サキーズ)	4.8	✓	✓
HLH ズ (アンテナーズ)	91.0 (ア <sup>ン</sup> テナーズ)	5.2	3.8	✓	✓
LH ズ (ゴミーズ)		97.5 (ゴ <sup>ミ</sup> ーズ)	2.5	✓	✓
LLLLH ズ (オトコノコーズ)	0 (オ <sup>ト</sup> コノコーズ)	100 (オ <sup>ト</sup> コノコーズ)	0	✓	✓
HHH ズ (ノーテンキーズ)	4.4 (ノ <sup>ー</sup> テンキーズ)	91.0 (ノ <sup>ー</sup> テンキーズ)	4.6	✓	✓

表6 「ズ」系列のアクセント

	初頭音節	語幹-3	その他	K & W	本研究
HHズ (ジョーダンズ)		84.9 (ジョーダンズ)	15.1	-	✓
LLHズ (タノシーズ)	90.4 (タノシーズ)	4.2 (タノシーズ)	5.6	-	✓
LHHズ (マシンガンズ)	0 (マシンガンズ)	100 (マシンガンズ)	0	-	✓
LLH <sup>s</sup> ズ (ハリケーンズ)	2.8 (ハリケーンズ)	87.6 (ハリケーンズ)	9.6	-	✓

B. 第II群における調査語のアクセント (LLLHズ, LLLLHズの結果は図2と図3を参照。「語幹-4」は「ズノーズ」に先行する部分の語末から4番目のモーラを含む音節にアクセントが付与された例を表す)

表7 「ーズ」系列のアクセント

	初頭音節	その他	K & W	本研究
LLHズ (ピアノーズ)	79.2 (ピアノーズ)	20.8	-	✓

表8 「ズ」系列のアクセント

	初頭音節	語幹-3	語幹-4	その他	K & W	本研究
LLLズ (ピアノズ)		84.9 (ピアノズ)		15.1	-	✓
LLLLズ (カナリアズ)	10.6 (カナリアズ)	77.2 (カナリアズ)		12.2	-	✓
LLLLLズ (パタゴニアズ)	0 (パタゴニアズ)	88.0 (パタゴニアズ)	4.2 (パタゴニアズ)	7.8	-	✓
LLLHズ (セロトニンズ)	0 (セロトニンズ)	13.0 (セロトニンズ)	78.4 (セロトニンズ)	8.6	-	✓
LLHズ (ポケモンズ)	75.7 (ポケモンズ)	8.6 (ポケモンズ)		5.7	-	✓

## On the Nature of the Morpheme [zu] in Japanese

GIRIKO Mikio<sup>a</sup>

OSHITA Takao

KUBOZONO Haruo<sup>b</sup>

<sup>a</sup>Postdoctoral Research Fellow, Department of Linguistic Theory and Structure,  
National Institute for Japanese Language and Linguistics

<sup>b</sup>Department of Linguistic Theory and Structure, National Institute for Japanese Language and Linguistics

### Abstract

The aim of this paper is to clarify how the accent locus of team/group names ending in the suffix [zu] is determined in Japanese. Based on the result of a production experiment we conducted, we argue that [zu] yields a “default” accent on the stem to which it is attached. This implies that stems that are pronounced unaccented as independent words are accented underlyingly.

**Key words:** [zu] morpheme, default accent, syllable structure, unaccented pattern, TETU